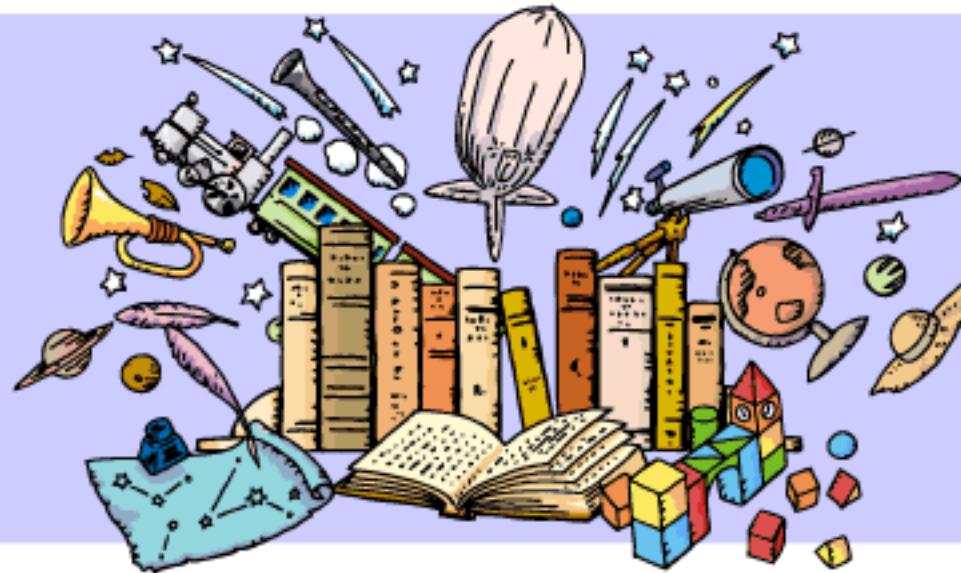


第6回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「かっぱのかあちゃん」

東京都 白百合学園高等学校 2年 市川 愛



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞／銀の星賞

東京都 白百合学園高等学校 二年 市川 愛

『かつぱのかあちゃん』

風呂蓋ふたを開けた僕は驚いた。湯船の中にはすでに先客がいたのだ。それは緑色をしていた。そして頭の上には白い皿がのつけていた。それは大きくてうるんだ目をもつていた。

河童かつぱだった。

僕はその大きな目に今にも吸い込まれそうだった。河童を見たことなど一度も無かつたが、それは河童と呼ぶにふさわしいものだった。そしてそれはこう言つた。

「スイカ食べたいさあ。」

これが僕とかあちゃんの出会いです。夏休み、受験塾から帰つて風呂に入ろうとした僕の前にかあちゃんは突然現れ、そして一週間後突然姿を消しました。これは僕とかあちゃんの共同生活の記録です。

月曜日・かあちゃんの出現

突然現れた河童はすいかを欲しがつた。僕は冷蔵庫からすいかを取り出し、切つてやつた。河童は風呂場から体をふいて上がり、クーラーのかかつたりビングの机にきちんと座つて黙々と食べている。河童の幻を見るなんて、僕は暑さで頭がおかしくなつたのかな、と考えていると、河童は僕を見透かすかのように言つた。

「あの、おいらまぼろしじゃないのさあ。どうしてもすいかが食べたくて河童界からやつてきたのさあ。」

河童の話によると、河童界では毎日毎食きゅうりを食べるという。彼は

それに飽きてしまったので、すいかを食べに来たそうだ。

なかなか面白い河童だな、と思った。僕の両親は小学生の僕を置いてけぼりにして先週からヨーロッパに旅行に行ってしまった。僕は中学受験のために毎日塾だからだ。そろそろ一人で家に居るのがさびしくなってきたので、心のどこかでこの河童の訪問を喜んでいた。

“河童”と話しかけるのもなんなので、僕は彼を“があちやん”と命名してみた。彼も案外気に入ったようなので、“があちやん”と呼ぶことにした。するとかあちやんは僕を何と呼べばいいのか尋ねてきた。僕が太郎という名前だと伝えると、かあちやんはこう言つた。

「じゃあタロちゃんだべさあ。」

その日は遅くまでかあちやんの身の上話を聞いた。最近河童界ではプラスチックの皿を頭にのせるのがトレンドだということ。きゅうりは色々と品種改良され、様々な形があること、（最新のきゅうりは星形をしているそ

うだ。）・・・。そんなことを聞いている間に僕はいつの間にか眠つていた。

火曜日・かあちやんの朝御飯

目を覚ますとかあちやんはもう隣に寝てはいなかつた。僕は昨日の夜、塾の宿題をやつていなかつたことを思い出し、朝食も取らずに学習机に向かつた。少しだと廊下からかあちやんの声がする。

「タロちゃん、朝御飯持つてきたさあ。ドア開けてえ。」

僕は立ち上がり徐おもむろにドアを開けた。かあちやんは頭の皿の上に味噌を添えたきゅうりをのせて立つていた。僕は思わず笑つてしまつた。河童の頭の皿は食べ物をのせるためにあるのか、と納得してしまつた。二人できゅうりを食べて、僕は机に戻つた。しかしリビングの方へ歩いて行つたかあちやんが気になつたので、そつとのぞいてみると、かあちやんは流しで頭というか皿を洗つていた。きちんとスポンジに洗剤をつけてごしごしやつ





ていた。その姿はほほえましいものだった。

水曜日・かあちゃんの大そうじ

僕が塾から帰つてくるとかあちゃんはバケツと雑巾を持って立つていた。何をやつているのか尋ねると、かあちゃんは答えた。

「タロちゃん、河童界ではね、水曜日は水の神様の日なのさあ。オイラ達は水がないと生きられないからね。だから今日は水まわりをピカピカにしなくちやなのさあ。だからタロちゃんも一緒におそうじなのさあ。」

おそうじなのさあ、と言われても僕には塾の宿題があるし、掃除ならいつもお母さんがしてくれているのに・・・、と思つていると、かあちゃんは僕に三角巾と雑巾を渡し、自分も皿の上から三角巾をつけた。

「ほら大事な皿にほこりがついたら大変さあ。」

とかあちゃんは言つた。そして

「おいらは風呂やるさあ。タロちゃんは便所やつてきてさあ。」

と言つなり、洗剤をタイルにまいてゴシゴシ洗い始めた。僕も仕方なくトイレ掃除をしに行つた。

かあちゃんから渡された雑巾で便座をこすりながら僕はふと思つた。何で河童であるかあちゃんと言葉が通じるのであろう・・・。考えれば考える程不思議に思えてきたので、あとでかあちゃんに聞いてみようと思つた。

トイレ掃除を終えた僕は風呂場のかあちゃんの様子を見に向かつた。風呂場の扉は閉まつていた。かあちゃん、と声をかけるが返事はない。嫌な予感がした僕が急いで扉を開けると、中は塩素の臭いが充満していた。かあちゃんは湯船の中で雑巾を握つたまま倒れていた。僕は急いでかあちゃんを抱き上げ、リビングのソファに寝かせた。かあちゃん、かあちゃんと何度も呼びかけたが返事はない。ああ洗剤を使う時はよく換気をするように言つておけばよかった・・・。僕は後悔し、このままかあちゃんが目を



賢治のまちから 高校生×河童大賞

覚まさなかつたらどうしよう、と悲しくなつた。救急車を呼ぼうと考えたが、河童を診察してくれる病院などどこにあるだろうと思つた。それならもしかして獣医さんを呼べば良いのか！ 色々考えたものの何もできないでいると、ソファからうめき声がした。

「ううう、タロちゃん水くれえ・・・。」

かあちゃんは生きていた！ 僕は急いでコップに水をくみ、かあちゃんに渡した。ほつとした。かあちゃんは生きていたのだ。かあちゃんは水を半分飲み、残りの半分は頭の皿にかけて言つた。

「おそうじしてたら、だんだん空気がツンとしてきたのさあ。タロちゃんのいる所にまでツンとした空気がいくとタロちゃん嫌だらうと思つたさあ。そんドア閉めたら、知らんうちに酔つてしまつたさあ。でも水飲んだら酔いは醒めたさあ。」

僕はかあちゃんはやさしい河童だね、と言つて、次に掃除をする時はきちんと窓と扉を開けてやるように教えた。かあちゃんは大きな目で僕を見つめてうなずいた。

木曜日・かあちゃんの河童語講座

「タロちゃんお帰り。すいか切つておいたから一緒に食べようさあ。」

かあちゃんは僕が帰つて来ると玄関で出迎えてくれた。スイカを食べながら僕は昨日便座を磨きながら不思議に思つたことを尋ねてみた。するとかあちゃんは答えた。

「おいらの学校では河童語の他に人間語の授業もあるのさあ。卒業してから人間の世界に留学する人もいるからね。だからおいらは人間語も話せるのさあ。」

かあちゃんが学生だつたことに驚きながら僕はスイカを食べる。かあちゃんは続ける。

「そうだ、タロちゃんに河童語を教えてあげようさあ。」

僕がうなずくとかあちゃんはスイカを食べる手を止めて話し始めた。

「まづね、こんにちはは „カパニチワ“ さあ。タロちゃんも言つてみてさあ。」

カパニチワ、と僕が言うとかあちゃんは目をぱちくりさせて

「タロちゃん上手さあ。じゃあ次はいただきますさあ。 „カパダキマス“ 」

僕が繰り返すと、かあちゃんは嬉しそうに次々と言葉を教えてくれた。ごちそうさま、は „カパソウサマ“ 、さようなら、は „サヨウカバ“ ・・。こうしてみると案外日本語と河童語は似ていた。人間と河童は似ているのかもしれないな、と僕は思つた。かあちゃんはすいかをたらふく食べて、満足したようだつた。そして言つた。

「ねえタロちゃん、おいら今度かつぱ巻食べたいさあ。人間語の教科書に載つてて、ずっと食べたいなあと思つてたさあ。」

僕が、今度ね、と言つて笑うと、かあちゃんも大きな目を細めて満面の笑みを浮かべた。

金曜日・かあちゃんの皿が割れた

朝からかあちゃんの様子がおかしい。緑色の体は赤みを帯び、とてもだるそうだ。昨日の夜、おなかを出してクーラーをつけたまま寝てしまい、風邪をひいてしまつたらしい。

「ハクショエー」

すごいくしゃみもしている。僕は塾に行かなくてはならなかつたので、かあちゃんにきちんと寝て いるように言つて、心配しつつ家を出た。

午後、帰宅すると、かあちゃんは今にも泣きそうな顔をしてソファに座つていた。

「タロちゃん、頭痛いさあ。皿にひび入つちゃつたさあ。」

見ると皿には大小無数のひびが入り、今にも割れそうだつた。くしゃみ



賢治のまちから 高校生☆電話大賞

の衝撃でできてしまつたらしい。かあちゃんの頭上があまりにも痛々しいので、僕は食器棚を開けて代わりになりそうな白い皿を探し始めた。棚の奥の方に良さそうな皿を見つけたのでかあちゃんに声をかける。すると突然

然

「ハアツクショエーン。」

というすごいくしゃみと共に

“ガツチャーン”

と皿が割れた音がした。僕が驚いて振り返ろうとすると、かあちゃんは叫ぶ。

「見ないでさあ。頭は誰にも見られちゃいけないのさあ。」

僕がどうしたらしいか分からぬでいると、かあちゃんは再び叫んだ。

「タロちゃん早く新しい皿を投げてさあー。」

僕はとつさにさつきの皿を投げた。恐る恐る振り返ると、かあちゃんは光の中に立つていた。光は皿とかあちゃんの連結部分から放たれていた。光は次第に強くなり部屋全体が眩しい程に明るくなつた。僕は目を開けていることができなくなり、その場にうずくまつてしばらく動けなかつた。

「タロちゃん、大丈夫さあ？」

僕はかあちゃんの声で目を開けた。かあちゃんはすつきりとした表情で立つていた。

「タロちゃんのくれた皿、びつたりさあ。ありがとうさあ。」

僕はかあちゃんを上から下まで見渡した。確かに僕がさつき投げた皿がかあちゃんの頭にはのつていた。

「こんなにいい皿もらえてうれしいさあ。向こうに帰つたら友達に自慢するさあ。」

僕は驚いたり疲れたりしたが、とりあえずかあちゃんが元気そうで良かつたと思つた。



土曜日・かあちゃんかっぱ巻を食べる

土曜日は塾が午前中だけなので、僕とかあちゃんは昼御飯に寿司を食べに行くことにした。かあちゃん希望のかっぱ巻を食べるのが目的である。さすがにかあちゃんを連れて外を普通に歩くのはまずいと思ったので、かあちゃんには塾に行く時に使っている鞄に入つてもらうことにした。かあちゃんは大きさの割に案外重かった。

「甲羅がある分重いのさあ。別に肥満河童ではないさあ。」

と、かあちゃんは弁明した。

僕は鞄を持って近くの回転寿司に向かった。歩きながら財布の中身を確認した。小銭ばかりだが数えてみると千二百五十円。かっぱ巻だけなら満足に食べられる、と僕は安心した。かあちゃんは時折鞄から顔を出してあたりをきょろきょろと見回していたが、かあちゃんに気づいて指を指したりする人は幸いにしていなかつたようだ。

店に着くと、カッフルが数組と親子連れが席に座つて食事を楽しんでいた。お盆だからだろうか、広い店内にもかかわらず客はまばらだつた。

僕は目立たないように店の一番奥の席へと進んでいった。家族連れの前を通る時、小さな女の子が僕の鞄を興味深そうに見ていたので、僕はさらに足を速めた。

席に着くなり、かあちゃんは頭を出し、

「タロちゃん、かっぱ巻早く食べたいさあ。」

と言う。僕は店員が水を運んで来るのを見て、とつさにかあちゃんの頭を鞄に押しこんでしまつた。

「痛いさあー。タロちゃん何するのさあ？」

店員は、どうかなさいましたか、と言ひながら僕の側らに水を置く。僕があわてながら、大丈夫です、と言うと、怪訝な顔をしてすたすたと去つ



賢治のまちから 高校生☆電話大賞

ていった。僕は店員が遠くに行つたのを見届けてから、鞄の中に入つてゐるかあちゃんに謝つた。

「おいらは大丈夫さあ。タロちゃん、騒いでごめんなさい。次からは周りをよく見てからにするさあ。」

とかあちゃんは言つた。

少しだしてかつば巻が流れて來た。三枚連續で流れて來たので、僕は三枚とも取つて、かあちゃんの皿の上にかつば巻を置いてやつた。かあちゃんは頭上に手を伸ばし、かつば巻をむしやむしや食べた。

「タロちゃんおいしいさあ。もつと欲しいさあ。」

僕もしようゆをつけて食べてみた。

おいしかつた。かつば巻を食べたのは久しぶりでなつかしい味がした。かあちゃんはしまいに自ら流れてきたかつば巻に手を伸ばして取つて食べた。奥の席に座つていたので、僕以外に誰一人河童がかつば巻に手を出しているのに気付いた人はいなかつた。僕達はかつば巻ばかり十二皿も食べた。一皿にかつば巻は四つずつつていたから、かなり満腹になつた。もうおなかいっぱいになつたかと尋ねると、

「タロちゃん、本当におなかいっぱいさあ。おいしかつたさあ。」

とかあちゃんが言うので、会計することにした。店員を呼ぶと、彼女は伝票を片手に皿の枚数を数え始めた。そして、そちらのお皿は、と僕の鞄を指さした。僕はハツとした。鞄からかあちゃんの頭が出ていたのだ。これは、と僕は口を開いたが、何と言えば良いのか分からなくなり、あせつてしまつた。すると突然、かあちゃんが鞄の中から飛び出してきた。

「これはおいらの皿なのさあ。おいら達が食べたのは全部で十二皿さあ。」

僕は青くなつた。かあちゃんもそれに気付いたらしく、ぎくりとした表情で僕を見ている。僕は面倒なことになつたなあ、と思い、店員の方をちらりと見た。店員は目をまんまるにしてかあちゃんを見ていた。そして、



賢治のまちから 高校生×富野大賞

ずいぶん良く出来た河童のロボットですね、と僕に言つた。僕は意外な反応に胸をなで下ろしつつ、ええまあ、と曖昧に返事をした。

帰り道、僕とかあちゃんは店員に正体がばれなかつたことを笑い合つた。

「おいらは本当にあせつたさあ。タロちゃんが大変な目にあつちやいそつたさあ。」

僕は、それよりかあちゃんがどこかの研究室に連れて行かれて、解剖されてしまわなかつた心配だつた、と言つた。するとかあちゃんは少し格好をつけて言つた。

「冒険に危険はつきものさあ。」

僕が笑うとかあちゃんは怒つた表情で、

「なんでタロちゃん笑うさあ。」

と言つた。

家に帰る途中、八百屋の前を通ると、きゅうりが一本五十円だつた。かっぱ巻は一皿百円だつたので、ちょうど五十円残つていた。僕は八百屋のおじさんに言つて、一番大きいのを買った。そして半分に折つてかあちゃんにもあげた。

「ありがとうさあ。タロちゃんもきゅうり好きなのさあ？」

僕が好きだよ、と言うと、かあちゃんは嬉しそうだつた。そして二人でセミが鳴く中をみずみずしいきゅうりをほおばりながら帰つて行つた。

日曜日・かあちゃん河童界に変える

朝起きるとかあちゃんがいなかつた。また朝御飯でも作つてくれていてるのかな、と思い台所をのぞくがかあちゃんの姿はない。僕は心配になつて家中を探した。かあちゃん、かあちゃん、と呼びながら、しかしかあちゃんは見つからない。半ば絶望していると、一ヵ所だけ探していないう所を思い出した。



賀治のまちから 高校生☆童話大賞

風呂場だった。僕はバタンと扉を開けた。
そこにかあちゃんの姿はなかつた。しかし置き手紙と置ききゅうりがしてあつた。

“タロちゃん、おいらと仲良くしてくれてありがとうさあ。おいらはそろそろ河童学校の二学期が始まるので帰るさあ。タロちゃんも塾がんばつてさあ。サヨウカパ”

かあちゃんの上手とはいえない字を見て、僕は柄にもなく泣いてしまつた。泣くのなんて幼稚園以来だつた。でも、もつとかあちゃんと一緒にいたかつたと思うと涙が止まらなかつた。そして泣きながらかあちゃんの置ききゅうりを食べた。そのきゅうりはかあちゃんと食べたみずみずしい味がした。

これで僕とかあちゃんの話はおしまいです。かあちゃんは河童界に帰つてしまつました。でも僕はかあちゃんはまた僕に会いに来てくれると思うのです。夏になつたら、すいかを食べに・・・。